

1 越前国御代官所絵図（写）

原図：貞享3年（1686）頃 福井市春嶽公記念文庫（当館蔵）

貞享^{じょうきょう}3年閏3月、福井藩は6代藩主松平綱昌^{つなまさ}の「病氣宜しからざる」（『国事叢記』）の理由から改易となり、前藩主松平昌親^{まさちか}に対して新規に25万石が与えられました。「貞享^{はんち}の半知」「貞享^{たいほう}の大法」といわれる大事件で、福井藩の石高は半減、家格も低下してしまいました。

召し上げられた22.5万石は幕府領となり、代官が収めることになりましたが、その際に描かれたものが本図と考えられます。幕府領となった村々を郡ごとに色分けして表しています。また白山三山（御前峰^{ごぜんみね}、大汝峰^{おおなんじみね}、別山^{べっさん}）や、平泉寺^{へいせんじ}、豊原寺^{とよはらじ}、三保大明神^{みほ}（現大湊神社）などが描かれているのも特徴です。

2 越前国鳥瞰図

江戸後期（19 世紀） 個人蔵

丹生山地にそびえる^{くにみだけ}国見岳山頂から越前国を見渡した鳥瞰図です。国見岳山頂には遠眼鏡（望遠鏡）を覗く人や遠くを指差す人が描かれています。腰には刀を差しているので、福井藩の役人が測量する様子を表しているのかもしれませんが。
「御城下」と書かれた福井城、「大御前（白山）」^{ざおうさん}「蔵王山（吉野ヶ岳）」^{もんじゅ}「文珠ヶダケ（文殊山）」^{あゆかわうら}「日野ヶ嶽（日野山）」^{さんりばま}「越智山（越知山）」の越前五山などの諸峰が描かれるほか、国見岳への入山口にあたる「鮎川浦」、「三里濱」やその沖合いの漁船、港町^{きたかた}「三国」、北潟の「湖」なども描かれています。

3 海浜巡視水陸路程図

嘉永3年（1850） 当館蔵

福井藩主松平慶永（^{よしなが}春嶽^{しゅんがく}）が嘉永3年9月に海岸御備場巡視のため足羽川～日野川～九頭竜川を下って、坂井郡泥原新保（現坂井市三国町新保）に赴いた際の水陸交通の路程図です。右端には福井城下の^{つくもばし}九十九橋が描かれ、その北詰には三国との間を往来している商船が見えます。少し左に目をやると、藩主の御座船^{ござぶね}六条丸が、藩の船を操舵する水主組^{かこ}の住む御舟町から出発した様子が見えます。明里の米蔵「御蔵所」、田谷の^{たのたに}大安禅寺^{だいあんぜんじ}などを見ながら川を下り、九頭竜川河口右岸の三国湊を過ぎて^{しゅくうら}宿浦に到着。その対岸の泥原新保浦には^{さんりばま}三里浜北端の砂丘が広がり、藩主慶永はそこで行われた大砲の試射を検分しました。

4 長泉寺山・水落森御狩場略図（写）

原図：嘉永6年（1853） 福井市春嶽公記念文庫（当館蔵）

藩主松平慶永（春嶽）御覧のもと、嘉永6年2月5日、長泉寺山・水落森（いずれも現鯖江市）で行われた兎狩りの絵図です。狛木工、岡部豊後、芦田信濃といった福井藩の重臣が勢子（鳥獣を追い立てたり、逃げ去るのを防ぎとめたりする役）の指揮を取り、かなりの大掛かりな狩りをしたことが、描かれた狩場の状況や記録からわかります。同年6月にはペリーが浦賀沖に現れ、日本は大きく動揺しますが、既にそれ以前から各藩によって海防強化が図られており、福井藩でもこの頃、No.3のような「調練」が度々行われていたようです。兎狩りも「調練」＝軍事訓練の一環だったのでしょう。

絵図には、森の中を走る白い兎や赤い狐が描かれていますが、狩りにより兎6匹・狐3匹が捕らえられ、枇杷（琵琶）山の本陣で「首実見ノ趣ヲ以、獲物御覧。終而勝鬬ノ式有リ」と記されています。

5 松岡御家中絵図（写）

原図：享保 15 年（1730）頃 福井市春嶽公記念文庫（当館蔵）

正保 2 年（1645）、3 代福井藩主松平忠昌^{ただまさ}が亡くなると、その嫡男である光通^{みつみち}が藩主となりますが、忠昌の庶長子で光通の腹違いの兄にあたる昌勝^{まさかつ}にも 5 万石が分け与えられ、松岡藩が成立しました。

本図から、松岡城下には内堀と外堀の 2 つの堀があったことがわかります。外堀の内側は藩士が住む武家地、外側は町人地^{まが}で、この町人地を縫うように勝山街道が通っています。この道は「十二曲り」と呼ばれ、今でも鍵折れの道が残ります。武家地を見ると、本丸に一番近い場所に「中根鞆負^{なかねゆきえ}」と書かれていますが、幕末に松平春嶽の側近として活躍した中根雪江は、この松岡藩士中根家の子孫です。

なお、松岡藩は享保 6 年に福井藩に編入されて廃藩となり、以降、松岡は鋳物業や酒造業を特産とする在郷町として存続しました。

6 福井藩十二ヶ月年中行事絵巻

江戸後期（18～19世紀） 福井市春嶽公記念文庫（当館蔵）

福井城下とその近郊を中心に、月ごとに年中行事や風物詩を選び、軽快な筆致で描いた絵巻物です。作者は福井藩士（居合師範）で狂画をよく描いた高畠夢蝶^{たかばたけむちょう}と考えられています。描かれているのは下記の12ヶ月の情景です。

「正月十四日 桜門前馬威^{うまおど}しの図」「二月廿日 三保嶋^{みほじま}祭礼の図」「三月 九十九橋桃花の図」「四月 足羽川^{いかだ}筏流しの図」「五月 菖蒲打^{しょうぶうち}の図」「六月 祇園祭^{ぎおんまつり}の図」「七月 盆踊りの図」「八月 鮎梁落^{あゆやなおとし}の図」「九月 加茂山坂鳥の図」「十月 護摩堂紅葉の図」「十一月 献上^{かんだらはやがけ}寒鱈早駈の図」「十二月 舟橋雪景の図」

八月 あゆやなおとし 鮎梁落の図

福井の主な川では、8月（旧暦）になると産卵のために川を下ってくる落鮎をねらって、梁漁が行われました。せき止めた川の1ヶ所に水路を作り、その狭くなった所に竹やスノコの棚を仕掛け、流水とともに鮎をすくい取るものです。この川漁は、秋になると見られる風物詩の一つでした。

九月 ^{かも や ま さ か どり}加茂山坂鳥の図

福井藩では、晩秋から翌年の春にかけて、田んぼに水を溜めて広い池を作り、そこに飛来する^{かも}鴨や^{がん}雁を、Y字形の投げ網で^{から}搦め捕る「坂鳥」「坂鳥打」と称する狩猟が盛んに行われました。水鳥が集まる池は各所に設けられましたが、特に加茂山・山奥（いずれも^{あすわやま}足羽山の一部）は藩が指定した坂鳥場とされ、多くの藩士に利用されました。

この年中行事絵巻には9月（旧暦）の風物詩として描かれ、投げ網を構えて頃合いを待つ猟師や、投げた網に搦め捕られた水鳥の様子が描かれています。

十月 ^{ごまどう}護摩堂紅葉の図

福井城下の南西、^{あたごやま}愛宕山（現在の足羽山）の南東の麓にあたる^{ごまどうだに}護摩堂谷一帯（現在の不動寺付近）は、切り立った^{しゃくだにいし}笏谷石の岸壁に^{つた}蔦がからまる紅葉の名所として知られていました。秋になると、美しく見事な紅葉を一目見ようと、護摩堂へ参る人々で賑わいを見せました。

7 あたごやま 愛宕山眺望図

江戸後期（19 世紀） 当館蔵

福井市街の南にそびえる足羽山は、江戸時代には「愛宕山」と呼ばれていました。この眺望図は、福井城下から足羽川越しに南西の愛宕山を眺めたもので、愛宕坂を上って足羽神社あすわじんじゃに至る参道の様子が中心に描かれます。画面右上には、柴田勝家によって一乗谷から勧請され、山の名の由来にもなった愛宕権現しょうげんいんの社が見えるほか、愛宕坂に面して、愛宕権現の別当寺であった松玄院（天台宗）境内や、羽明明神はあかりの別当寺であった寿命院じゅみょういん（真言宗）の多宝塔たほうとうなどが描かれています。山の麓に目をやると、左から中央にかけては北陸道沿いの家並みとそれに続く半石半木つくもばしの九十九橋、右には寺町の寺院の大屋根が表されています。足羽神社境内に「継体天皇御碑」（継体天皇世系碑として現存）が描かれ、同碑は弘化4年（1847）に建立されていることから、概ねその頃に描かれた眺望図と考えられます。

8 ^{しゃくだに} 笏谷之内^{あげまぶ}揚間歩検地図（写）

原図：明治4年（1871） 福井市春嶽公記念文庫（当館蔵）

笏谷は足羽山の北西部、^{おやまだに} 小山谷と^{かもがわら} 加茂河原との間に位置し、越前
の名石で「青石」とも呼ばれている「笏谷石」の産地です。笏谷石
は青みの美しい凝灰岩で、加工が容易なため古くから様々な用途に
利用されてきました。この笏谷石を切り出す所を^{まぶ}間歩または^{いしまぶ}石間歩
といい、福井藩では笏谷石の採掘権を知行の一端として重臣八家に
分与し管理しました。本図には本多、酒井、芦田、狛、山縣（笹治）、
山川、松平、稲葉の名が元の知行者として書かれています。

これらの採掘権は、明治4年の廃藩置県によって収公されました。
本図は採掘場所を確定するために作成されたもので、収公された間
歩（揚間歩）については、面積と周囲の長さが記入されています。
絵図の下辺に見える青色の部分は、笏谷付近を流れていた足羽川で、
その右方には、石を積み出すための^{こうど}河戸の場所が示されています。

9 宮前村絵図（写）

原図：江戸後期(18～19世紀) 福井市春嶽公記念文庫(当館蔵)

坂井郡宮前村（現あわら市宮前）の村絵図です。江戸時代の地誌『越前国名蹟考』^{えちぜんこくめいせきこう}には、貞享頃（17世紀後）までこの地域^{こうま}に人家は無く、隣村の河間村により耕作されたと記されています。

赤色に塗られた場所は畑地を表し、字ごとに上畑・中畑・下畑の面積が書かれています。また金津川（現竹田川）の川筋が現在と異なり、大きく迂回して流れていますが、現在の地図で宮前区の範囲を確認すると、旧川筋に沿った飛び地があり、その痕跡を見ることができます。さらに集落西側は、公文村を挟み込んだような村域になっており、複雑な村の成り立ちを物語っています。

10 九ヶ用水絵図

享保4年（1719） 九ヶ江組蔵（当館保管）

現在の福井市西藤島地区の^{みつや}三屋、^{じぞうどう}地蔵堂、^{えびすけ}海老助、^{べっしょ}別所、^{うえぶせ}上伏、^{やすたけ}安竹、^{つちはし}土橋、^{くろまる}黒丸、^{こおり}郡からなる「井組九ヶ村」から、福井藩の用水奉行へ差し出された絵図です。この地域は^{しばはらようすい}芝原用水の末端に位置し、毎年用水不足に悩まされていました。

図の中央に東西に伸びる細長い畑地（堤防）があり、その南側を九ヶ村の用水が流れています。赤色で示される^{なかつのかいどう}中角街道が用水をせき止めるような形で「井袋」^{いぶくろ}が形成され、そこに7本の江口（引水口）が設けられて各村に水が引かれていますが、土砂の流れ込みなどによって下流への水吐きは悪かったようで、水量をめぐる上流の村との紛争が度々起こったようです。

11 ^{よしざきうら}吉崎浦絵図（写）

原図：寛永5年（1628） 福井市春嶽公記念文庫（当館蔵）

加賀と越前との国境にある坂井郡吉崎浦（現あわら市吉崎）を中心に、その南に広がる北^{きたかたこ}潟湖周辺の村々を描いた絵図です。吉崎浦では、畑地を黄色、田地を緑色で示し、字ごとに田畑のランクを上中下に分けてその面積を記しています。また集落の家並みや、吉崎^{よしざきごぼう}御坊跡、春日宮などが描かれています。

北潟湖の水は吉崎浦を通して大聖寺川の河口につながり日本海へ流れますが、この絵図が描かれた江戸初期には、まだ汐留も無く、かなりの海水が北潟湖まで流入していたようで、吉崎浦は水運やカキ養殖業で栄えていたようです。

12 ^{きたかたうら}北潟浦一円之図（写）

原図：明治4年（1871） 福井市春嶽公記念文庫（当館蔵）

現在のあわら市北潟湖周辺を描いた絵図で、明治の初め頃に役所に提出されたものの写しです。吉崎浦絵図とほぼ同じ場所を描いていますが、本図では、測量などを基に、より詳細に地形の特徴が描きこまれています。

17世紀中頃以降、加賀大聖寺藩の新田開発が進んだ影響で、大聖寺川の運ぶ砂が堆積して化粧ヶ市（現加賀市吉崎）と鹿島が陸続きとなり、北潟湖への海水の流入が減少しました。このため、吉崎浦のカキ養殖は徐々に姿を消していったようです。さらに慶応3年（1867）には福井藩により吉崎浦と浜坂浦の渡し場のあった場所に一直線の汐留堤と水門が作られました（現在の開田橋）。これは北潟湖の淡水化を進め、湖岸の干拓新田（本図の黄土色部分）への塩害を防ぐために行われたものでした。

13 ^{いくらうら}居倉浦地籍図

明治6年（1873） 当館蔵（福井市蒲生町青木喬家旧蔵資料）

現福井市居倉町（越廼^{こしの}地区）の地籍図で、明治初めに描かれたものです。居倉は、元応2年（1320）12月13日付「預所代僧刀禰職宛行状」（山本家文書）に「居蔵浦」と出てくる、歴史ある半農半漁の浦方です。明治末から大正時代にかけて、海岸の一部に自生していた水仙を株分けして生産量を増やし、昭和初期には出荷組合を組織するまでになりました。越前水仙の里として、現在でも水仙栽培が続けられています。

さて、現地は斜面に畑や集落が展開しており、本図ではその様子を伺うことは難しいですが、田地よりも畑地が多いことから、水田に適した平地が少ないことがわかります。谷川沿いや海岸に近い場所に石積みをして平地を作り、僅かな田地を確保していました。

14 ^{がもううら}蒲生浦地籍図

明治初期 当館蔵（福井市蒲生町青木喬家旧蔵資料）

現福井市蒲生町（越廼地区）の地籍図で、明治初めに描かれたものです。蒲生は江戸時代の正保郷帳によると、「田方五石余、畑方二八石余」とあり、きわめて耕地が少なく、古くから漁業・海運業を営み生計を立ててきた地区です。一本釣りや延縄^{はえなわ}・刺網漁^{さしあみ}が盛んで、北に隣接する茱崎浦^{ぐみざきうら}とともに福井藩に初鱈^{はつだら}を献上したと『越前国名蹟考』にあります。明治5年の戸数は202戸、人口1209人で（『足羽県地理誌』）、漁村として茱崎とともに県下に名を馳せました。

本図を見ると、田方（黄色）は7区画のみで、農地の殆どは東方の山側の畑方（緑色）です。家屋は南北に貫く道に沿って立ち並び、西方の海側には漁船が出入りする船揚場^{ふなあげば}となっています。

15 しいらづけば 鰯漬場絵図

明治 11 年（1878） 当館蔵（福井市蒲生町青木喬家旧蔵資料）

昭和初期まで越前海岸沖で盛んに行われていた鰯漬漁の漁場を示す絵図です。シイラ（鰯）は成魚で体長 2 m に達し、白身の淡白な味で、特に夏は美味とされます。世界中の熱帯・温帯海域に広く分布し、温帯域では季節に応じて回遊。日本海では暖流に乗って夏から秋にかけて北上し、水温が高くなると沿岸に近付きます。

鰯には流木などの浮遊物の影に集まる習性があり、その習性を利用した「漬木漁^{つけぎりょう}」が行われました。北陸で古くから行われた伝統的な漁法で、海上に漬木場を設けてそこに集まる鰯を釣りや網で捕獲しました。

本図には、越前海岸の玉川（現越前町）から南菅生（現福井市）
までの入会漁場いりあいが示されています。漬木場の位置は、2つの山
の見え方による「山当て」やまあにより決められ、本図には山当ての
線が交差する漬木場に、持ち主の名が記されています。入漁し
ていたのは、玉川、左右そ う（以上現越前町）、居倉、蒲生、茱崎ぐみざき、
白浜、南菅生（以上現福井市）の七ヶ浦で、特に蒲生浦の青木
勝左右しょうざうの所有数が多かったようです。